

教会の高齢化に関わる問題に関して

関 昌宏

日本では世界で類を見ないほど急速な高齢化が進んでいると言われます。平均的に国民が長生きになった事と共に、少子化の流れが相まって「超高齢化社会」が到来しつつあります。以前過疎化の進んだ地で牧会していたことがありましたが、日中外で出会う方は高齢者が多く、中年より若い方々は医療関係か福祉関係の方がほとんどであった記憶があります。日本のすべての場所がそのようになるとは言わないまでも、「高齢化社会」と言うときに私が思い出す光景の一つです。

社会の高齢化は当然教会をも高齢化させます。「次代を担う若い方々を捉えたい」、「若さ溢れる活気のある教会を」という思いは多くの牧師が抱くものですが、社会が高齢化しても、教会は高齢化しないということはありませんでしょうか。今日礼拝出席者の平均年齢が60歳を越えるという教会は決して珍しくないと思います。長年信仰の道を歩んで来られたご高齢のクリスチャンが、平安の内に、その生涯を全うできるよう努めたいと思いますし、年を重ねて「何の喜びもない」（伝道者12：1）と言う高齢者に慰めを伝えることも高齢化社会における教会の大切な使命と考えます。また高齢者の持つ豊かな経験や知恵、そこに結実している御霊の実を見せられ、分かち合われることは教会全体にとって大きな宝です。

しかし同時に高齢化は教会に様々なインパクトを与えています。例を挙げますと、

- ① 過去に囚われやすくなって未来志向が難しくなる。「昔からうちの教会ではこのようにやってきた」といった発言が多くなり、また力を持ちやすい。結果的に教会が保守的となって新しいものを取り入れにくくなり、置かれた時代の求めからかけ離れたものとなってしまふ危険がある。たとえば礼拝で歌う讃美の選曲ひとつでも高齢者と若い人たちの間にはギャップが大きい。
- ② 会議の進行が難しくなる。回りくどい発言が多くなったり、進行そのものがスローペースとなる。若い人たちにしてみれば、そうした場を自分の居場所とは考えられない。また高齢者は一般的に言って自分の考えを譲ると言うことが難しくなる。（これは教会生活が長く、責任を負って来られた方こそそうなりやすいのではないだろうか。牧師である自分も注意しなければと思う。）さらによく聞こえなかったり、人の話が飲み込めないために疎外感を味わい、そこから高齢者が攻撃的になったり、引きこもったりすることもある。（こういうことが原因で集会を欠席するようになったり、また高齢者のそうした行動が他の信徒に影響を及ぼすこともある。）

- ③ 高齢者の割合が一定数を超えると、若い人たちはそこに居ることに違和感を感じる。高齢者の方々は若い人が居ると喜ぶものである。「若い人との交わりが欲しい」という声も良く聞く。年齢構成的に適度のバランスがあれば良いであろう。しかしあまり高齢者の割合が多くなりすぎた集まりには、若い人は集みにくい。自分の居場所として認識できないのである。
- ④ 体が不自由になると教会の集会自体に来たくても来られない教会員が増加する。彼らへの配慮は欠かせないと思う。一生懸命主のため、教会のためにと仕えてこられた方々の晩年が教会と切り離されたものとなってはならない。しかしこうした方々が一定数を超えるとき、牧師・牧師夫人だけではとても対応しきれないことも事実である。教会の中に高齢で集会へ来られない方々をケアするチームが必要でないだろうか。
- ⑤ 献金の減少。私はいくつかの超教派活動に関わっているが、その集まりで良く耳にするのが、近年の献金減少の問題である。これは教会レベルでも、超教派団体レベルでもかなり深刻な問題と感じる。背景として教会や超教派団体を経済的に支えて来た方々の多くが退職し、年金世代に入りつつあること。一方40代から下の世代は雇用が不安定な上に、そもそも教会への所属意識が希薄な方も多く、「私が犠牲を払って支える」といった意識に乏しい傾向がある。お金の使い方、献金の尊さについては小さいときや、早い段階から教える必要がある。大胆にささげる経験も人生の早い段階で経験させたい。と同時に日本人が無頓着になりがちな点、貯蓄（ストック）には励むが、そこから新たな資金流入（フロー）を生み出す工夫にも意識改革が必要と思う。年金生活に入ったからと言って現役時代の半分程度の収入で慎ましく生活するのは良いとしても、献金までも半分になってしまえば、超高齢化時代の教会運営はなかなか厳しい。しかし高齢者の所有する豊富な貯蓄が新たな資金を生み出せるようになれば状況は一変すると思う。

以上、私が見聞きしているところでの教会と高齢化の断片を列記してみました。まだまだ様々なことがあるだろうと思います。こうした高齢化に伴う諸課題はこれから長期に渡って日本の教会が直面し、乗り越えていかねばならない課題ゆえ、教会、教派を超えた情報交換や分かちあい、協力が望まれるところです。そうしてこそ「あなたは白髪の老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」（レビ19：32）のスピリットを生きていくことができるのではないのでしょうか。

さて今回は私自身が約10年前から直面している教役者両親の高齢化に伴う問題に触れて本稿を締めくくりたいと思います。

高齢化の課題は教会に仕える教役者自身や教会員の問題ばかりでなく、教役者の親が高齢化することによる問題も多数生じていると考えられます。私の場合、三重県の教会に赴

任した時が今から16年前、その時は横浜に住む両親も64歳であったので、生活習慣病はあっても、まだあまり高齢化の課題を感じませんでした。しかし父が70歳の時に腎不全から脳梗塞を起こし、それからはしばしば入退院を繰り返すようになりました。また痴呆や目の不自由も進み、一人息子の私や家内が横浜へ行かねばならないことが多くなりました。名古屋から横浜までは新幹線に乗れば「のぞみ」で一駅ですが、それでもしばしばの往復は経済的にも時間的にも多くの犠牲が伴います。10年間の内で親の介護や入院のために主日を留守にすることはありませんでしたが、週半ばの祈禱会は家内に任せてということがよくありました。幸い教会の皆さんも良く理解してくださり、祈り、サポートしてくださいました。父は昨年夏に施設で受洗に導かれ、11月平安の内に天に召されていきました。今は横浜で一人暮らしをしている80歳の母の老齢に伴う課題が大きくなりつつあります。

教役者の年老いた親の課題といっても一様ではないでしょう。老化の表れ方も違ひましようし、性格や経済力、教会生活があるかないかでも対処が変わってきます。またここに至るまでの親子関係のあり方が、親が老齢になったときに微妙な影響をもたらします。以前ある精神科医が「一日の仕事を終えて家に帰ってから妻の話を聞く余裕はない」と言っていました。牧師である私も似たところを感じています。教会員であるならば忍耐を持って聞ける話も、老齢の母となると実に難しいのです。「母を主に導くためには、こんな状態ではいけない」と感じるのですが、同時に余裕のないものはない。大きな葛藤をおぼえます。牧師をしている者でも、いや牧師として普段多くの人に触れている者だからこそ、自分たちだけで年老いた親と関わることには精神的にも体力的にも困難を感じるのです。それゆえ教役者家族の高齢化への対処にあたっては、現在奉仕している教会での理解とともに、高齢家族が住む地にある教会（出身教会）の理解と働きかけも欠かせません。献身者を送り出した教会はその教役者の老いゆく親に重荷を持つ、また教役者を迎えた教会もその親のことにまで心を用いることができないと息の長い牧会は困難になってくるように思います。「しかし、もし、やもめに子どもか孫がいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。」（第一テモテ5：4）とあります。

少子高齢化の時代にあっては、たとえ神に全生涯を捧げた身であっても、かなりの時間とエネルギーを老いゆく親に注がねばならない現実があります。私の場合、どちらかといえば神学生時代から「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」（創世記12：1）が引用され、「献身したら、慣れ親しんだ家族を離れよ」ということが強調される環境にいました。日本的な家族関係を考慮すると、教役者となるために神を知る上では、重要な訓練であったと理解しています。また個人的にも22歳で献身し、心理的に親への依存が抜けていなかった者にとって、こうした環境は必

要なものでした。しかし親から離れると同時に、積極的に親と関わらなければならない。親の行く末を案じなければならない。少子高齢化時代の献身者、教役者はこの両面を持つことをおぼえて、直面する母の介護に心を用いるとともに、後進にしっかりと方向付けをしてあげたいと考えるものです。

(チャーチ・オブ・ゴッド・春日井栄光キリスト教会牧師)

